



常識と個人



ヤマダヒフミ

私達の生涯がこんなにも惨めなのは、私達が生きる事に過重な重荷を強いている事に由来する、と私は思っている。

例えば、考えてみよう。私が――そう、妊婦だとする。そうすると、この新参の妊婦には、夫、家族、その他無数の人間から、子供を大事にしなければならない、子供をいたわらなければならない、という無限とも言えるマニュアルが押しつけられる。結果、妊婦――あるいはこの子供を生み、育てるようになった私は、様々な場所から押しつけられたこのマニュアル、・・・ねばならぬという事項と、現在の現実の自分との乖離に対して決定的に悩み、そこから沢山の悲劇的事項が生まれてくる、という事は十分に考えられる。そしてまた、そうした事はこの二十一世紀の現在の日本では、沢山多発しているのだろう。

私はもちろん、マニュアルというより、真理を迫撃し、攻撃したい訳ではない。だが、私は、私達の世界では余りに個別性、人間の独自性というものを糾弾されていると感じている者だ。私達は多数の決定した真理の中にいると安堵する為に、みんなですりよってゆくの場所。そしてそこで一つのモデルとなるような場所が、既存の様々なメディアが活躍している場所なのだろう。

私達は、今、メディアの異常な発達――それはもちろんインターネットの事である――によって、全体が一つに和合するチャンスとなっている。私は、現在の各国のナショナリスティックな主義主張の勃発にも関わらず、テクノロジーが人間の思想や感情、行動や果ては容姿まで平均化していくのだ、という風に考えている。それは例えば、次のような事だ。私はパリの友人と話したいと考える。この距離は直接的な距離は非常に遠いが、インターネット回線を通じれば、一瞬である、というような非常に単純かつ強力な事に基づいている。そして、インターネットにとって文化の差の障害としてもっとも強固そうなものは言語の差ではないかと思う。だが、この言語の差というものもやがてはならされて、平均化してゆくだろう。

だが、それにも関わらず、私は全く逆の事実も同じように予想している。つまり、各国の文化の差異は馴らされて一つの点に収束してゆくだろうが、それとは全く反対に、思想の違い、というより、個人のほんのちょっとした好みの違い、好悪の差というのはますます激しくなっていくのではないかと思う。それは今、ネット上で現れているちょっとした事による、おそらく未来の人間からすれば一体なぜこんな事で争っているのだからさっぱり分からないような事での血を見るような討論などに現れている。つまり、ほんのちょっとした思想の違いにより対立は激化するが、これまでの対立の主な原因であった、文化の違いや言語、服装、考え方の違いの差異はなくなっていくと私は予測している。

これは何故かと言えば、やはりテクノロジーの問題である。テレビに比べて、インターネットは遙かに便利な媒体である。それぞれの個人は、自分の好きな時間に飛んで行って、自分の好きな情報を取ってくる事ができる。かつて、ドストエフスキーが、このペテルブルグという都市はそれぞれが穴を掘って蟻塚のように暮らしている・・・というような記述をしていたのではないかと思うが、現代の都市は、電腦上にその住処を移し、遙かに複雑に、そしてこの蟻塚の一つ一つの穴はかつてより遙かに深くなっているのだ。

こうして、私達の世界は、それぞれの思想・・・というより、好悪の違いはますます激しくなり、個人と個人の違いはますます深くなり、その対立は激しくなっていくのだが、その外形の違いは単一化していくのである。

だが、私はまたこの文章のはじめの点に戻って、考えてみよう。私は少々大きな事に言及しすぎたきらいがある。

私達の今の世界は間違いなく単一化に向かっている。私達の世界というのは、中央にメディアというものが君臨して、そこから様々な無数の目に見えない指令が出されているかのような状況である。そして大衆的な、大衆が王となったこの世界では全ては平凡化され、凡庸化され、個性というのは尊重されないどころか、他人が私達全体と違う考えを持っていると知るやいなや、私達はその人間を全力で排撃する、という始末だ。結局、イデオロギーというのは、どういう思想の持ち主であろうと、他人の異なった考えを認められないという点に端を発しているのだろう。もちろん、思想は議論されるべきである。だが、思想を思想として尊重しない者達にとっては、相手の脳髓を破壊すれば、その思想も壊せる、と考える。自分自身の思想がそのようなデキだからである。だが、真理というのは、我々の肉体を上回っているから真理なのだ・・・という点に彼らは気付いていない。彼らは湧いては消える虫のように消えていく。だが真理はすぐれた人の手を伝って、あらゆる時代と空間を越えて渡っていく。

・・・私達の世界が単一化に向かっているというのは、もちろん価値観の統一化である。大抵の親は自分の子供に、凡庸でもある程度良い生活を送ってもらいたい、と考えるものであろう。そこでは凡庸という事は善である。だが、純粋に凡庸な人間などいない。私達は個性を持ち、それぞれに天才性を持って生まれはするのだが、大抵の場合、それを行使しないか、自分達でその天才性を否定して、この人生を終えるのである。

私は常々考えるのだが、完全な天才などはいないし、また完全な凡庸な人間などはいない。・・・だが、天才の残した作品、業績などは、真に天才的であり、そこに一片の凡庸性も見受けられない場合は多々ある。そうした場合、人は、作品や業績から推して、その作者並びにその功績者も百パーセント、純粋な天才ではないかと夢想するのだが、実際はそうではない、と私は思っている。彼らは絶えず、自分の中の凡庸さを押し殺し、自分の中の天才性が外側に滲み出てくるのをじっと耐えて待っていた、そうした存在なのだ。・・・そう考える事は、何も私の夢想ではないと思う。「ゲーテとの対話」というエッカーマンの本には老ゲーテの「ファウスト」製作に関するゲーテの、ちょっとした愚痴についても書き記されている。ゲーテは朝の、睡眠をたっぷり取った、体力旺盛な時にこのファウストを手がけるのだが、どれほど調子が良くても一日に書くことができるのはせいぜい手のひら一杯分くらいの原稿である、というような事を語っている。私達が見事な出来映えに驚嘆する、その作品というのは、作者が苦勞の末、自らの凡庸性を押し殺して、奥に僅かに残った天才性を振り絞って作り上げたものだと考える事は、例え多少誤った考えだとしても、私達にとって不利益となるような事はないように私には思える。なぜならば、やはり私が始めに主張した通りの百パーセントの凡庸な人間も、百パーセントの純粋な天才もいない、という考えは当を得ているように思うからである。逆に考えれば、私達のような凡庸な存在というのは、日々、私達の内天才性を殺している存在なのだ。私達の内、誰にもちょっとした思いつきや独創性が芽生える事は多々あり、そんな何気ないものが実は天才性の萌芽なのだ(だから子供というのはおそらく常に小さな天才なのだろう。)、私達は日々の生活の中で押し殺し、常識というものにそうしたものを意図的に自ら屈従させているのである。・・・そしてそうした事が続けば、我々は立派な社会人、大人となって、判を押ししたような個別性のない人々の群れとなっているのだろう。

だが、もちろん集団性、というものは必要であるし、我々が凡人である事によって、この世界という機械は運動する事ができるのだが、だが同時に別にそれは我々の独自性を屈従させ、抹殺させる理由とはならない。元々、この世界という機械のアイデアそのものの殆ど全てが、何かしらの独創性が開花し

た姿に他ならないからである。

私は、妊婦や子育てする母親という例から、とんでもない場所に出てきてしまったようである。だが、こうした卑近な日常生活と、天才と凡人の差などといった大きな話は無関係ではないどころが、ごく近いものだと考えていくくらいのものだと思っている。もう一度、話を戻すと、私達は余りに一般性という規範というものに溶け込んでいる為に、私達自身の独自性や、個別性がほんの少しでも芽生え出すと、他人のでも自分のでも、すぐにそれを抹殺させないといけないような気になるが、決してそんな事はない、という事を私は言いたかったに過ぎない。

私達の現代人の人生行路に際して、私達が私達の背中に重く載せられた荷を軽くする方法は、おそらく次のようなものであろう。つまり、生というものをもう少し軽く考える事、そして死というものをもう少し重く、大切に考える事である。

この事は周到に説明しなければ、必ずや誤解を招くだろうから注意を要する。(そして自分の正義の為に他人の意見を緩用しようとする輩は、いくら周到に説明した所で、必ず意図的に曲解、誤読を行うものだが……。私は、正読を好む見えない読者に対してなのだ。)現在のように、私達が生、つまり生きる事に対して過剰な意味と重みを加えているという事は余り良い事ではない、と私は考えている。何故ならば、結局の所、人間は老いて死ぬものであり、その当たり前の摂理に対して真っ向から刃向かおうという現代の風潮はつまり、最初から不可能と分かっている事につかみかかる事によって様々な不幸を、この限定された生を生きている私達に及ぼす事になるからである。

こう考えてみよう。もし、私達が不老不死であったら、と。おそらく私達は退屈の余り、死ぬ事を欲するだろう。その方法を発見しようとするだろう。……。先日、私は書店で「五十代だが三十代に見える方法」……。というような(正確ではない)本を発見して、奇妙な感じがした。五十代の人間が三十代に見られる事を望むとはつまり、自分自身の五十代を否定しているようなものではないか。もし私達が七十代にも関わらず、二十代に見える技術を発見したとして、それは幸福な事だろうか。ならば、その人は二十代においては一体、何をしてきたのか。永遠に二十代でありたいというのか。

生きる事そのものは素晴らしい事である、と人は言う。だが私は言う。生きる事とは何ものかを消費して、浪費して生きる事であると。私達が生きるには、この現代社会では様々なものを支払って生きる事になる。それはもちろん、金や物資などもあるが、もっと世界全体に関わるもの……。私達は、私達が身につけたり、食べたりしている全てのものが一体、世界のどこからやってきて、どのように消費されているのか、全て把握しているだろうか?……。もちろん、そんな事は分からない。だが現在の産業を考えるならば、私達が生きる為には、人間や動植物、無機物を問わず、実に様々なものが私達が存在する為に消費されているという事はもはや疑いようのない事だろう。

こんな事を言って、あえて人に、自身の罪の意識を起こさせようなどという気は私は毛頭ない。私は環境保護主義者ではないし、そのような団体に入った事もない。だが、問題は実際に私達が存在する為には無数の物が浪費され、破壊され、失われ、そして再構成されているという事実である。そしてそれに抗する事のできる理というのはゲーテのファウストに示されたような、結局、我々がより高いものに導き、到達する為には、それより低いものが犠牲にされる事もあえて甘受されなければならないだろう、という原理に基づく。(だが、もちろんその事を言い訳に破壊する事が許された訳ではない。世にしばしば現れる「正論」というものの内のいくつかは、こうして目的の為なら手段を選ばない、そして目的よりその手段が重要視される事により、最悪の結果を生むからだ。)

私達は私達が存在するために、多くのものを失う事によって存在せざるを得ない。だからこそ、私達

はこの生涯において、失う事を怖れるより(それはもう決まっているのだ。私達がこの世に生まれ落ちた瞬間から。)何ものかを創造するように努力すべきである、というのが単純な私の脳髓の結論だ。そして、こうした結論が、常になにもものも失うまいと努力している人々、つまり私が丁度現実主義者と考えている人達にあざ笑われる事を、私はよく知っている。彼らは必ず、次のように言う。「お前の言っているは確かにそうかもしれないが、誰しもがそんな風に創造する才能に恵まれている訳でもないし、とにかく現実というものはそんな風にうまい事は出来ないものだ。世の中には、守らなければならない規範が沢山あり、それをしっかりと守るのが大人の判断である。子供らしい、未来だの、創造だの、ああ馬鹿らしい。(ここであの走れメロスのメロス風の嘆きが入る。)現実というのは卑小な、小さなもので、それを守って、世の中の理に従順に生きるのが正しい生き方で、お前の言っているのは子供の夢に過ぎない・・・」というような事だ、つまり。だが私の考えるのは次のような事である。つまり、失うまいと、この世界の規範を守った果てに一体、何があるのか。自分という存在はやがて年老いて、死んでしまうのである。そしてそうした事は現在では避けられないし、もし我々が不老不死だとしても、一体それが何だというのか。結局、何もしない人生はゼロではないか。ゼロにゼロをどれほど積み重ねても、ゼロではないか。

だが、こんな理想と現実の対立は古代から現在まで続いてきたし、間違いなくこれからも続く事であろうから、その結果は読者の想像に委ねよう。私はただ、現在のこうした現実主義的風潮が現実、そして人生というものを不当に重苦しくしている、という事だけを言おう。我々はパイを失う事に汲々としている。だが、それは結局は失われるものだ。私達がしている事は、天上からサラサラと落ちてくる砂を全て両手の手のひらで掬い上げようという努力に似ている。それは結局どれほどがんばろうと、必ず両の手のひらからこぼれ落ちて地面に落ちてしまうし、この落ちてくる砂はいつまで立っても止まないのである。

私達は自分達の生に執着する。私達はこの人生で得られるはずの非常に多くのものを社会に、そして他人に要求するが、そうしたものはもちろん得られずに、私達は憤慨と失望の中で死んでいくのである。そしておそらく、こうしたものに拍車をかけているのは商業主義的な思想——つまり、人は人に対して幻想を見させ、それに金をかけさせるという方法を非常によく熟知しており、そうした産業が俄然発達しているので、そうした幻想はやまず、そして結局、幻想は破れるものであるから、私達が夢を見ている内はいいとしても、結局それら夢は破れ、あの失望と倦怠に再び戻ってくる事になる。

初めの妊婦や子育てする母親の例に戻ろう。ここでは、様々な情報や知識が、この善良であると仮定されたこの新人の母親にとって参考となる限りは役に立つものとして機能するのだが、こうしたものが次第に重荷になり、もはやそれが人々の手を介して要求ともなれば、この若い母親にとっては途方にくれるか、一切全てをなげうちたい、という非常な重荷を感じるのである。そしてまた、こうした事は、正義や真理という見かけを保っているために、個人としての私達には非常に反駁しがたい、面倒な事として現れるのだ。

そしてこうした、過度な真理や正義というのが、社会の至る所に充満しているために、私達の生は過度に重苦しくなっている。そしてその過度の正義や真理というのは、先ほど私が言ったように(人々は往々にしてそう思いたがるが)、どこか別の預かり知らない他人が作り出したものではなく、私達が自分達の生に対して余りに大きな意味と過大な価値と沢山の要求を課している為に起こっている現象なのである。

ここで私がこの文章の途中で挟んだ提案が、ようやく再び戻ってくる。つまり、我々は我々自身の生をもう少し軽く考え、私達の死をもう少し重く見るべきである、という提案だ。そしてこの二つ、生に

ついでに、死についての思想は密接につながっている、というよりほぼ同一のものである。何故なら結局は、死に対する逃避自体が、生に対する逃げ口上、生の意味を過度に重くする事につながるからである。そして人はまたその逆の事態に陥ると、社会の為に個人は死ぬべきである、という今度は死に重みを傾け、生を非常に軽く考える、という傾いた傾向性に陥る癖があるが、それについて取り上げるのはまた別の機会にしたい。今は、生に対する重みが問題である。・・・そしてこの生の重みを取り除くのは、私達があらゆる物事を他人に押しつけようとする性行を矯め、自身の背後一つつまり、自分自身の死、という最高とも最低とも言える宿命を見つめる、という点に重要な要点があるのだ。そして優れた個人としての生涯は、常にこうした自身の宿命を見つめる、という点から起こる、と私は考える。それが無名であろうと、有名な人物であろうと、それが個人として全うかつ正直であり、世界に流される事なく自己の道を進んだ、それも善良な方向に進んだ、と言えるのは、この社会にいかにか貢献したか?という尺度より、自身の死という宿命を見つめる事が結局、我々に我々の存在を越えた何ものかを認識させると共に創造させる事を可能にするのだ、と私は思うのだ。

さて、私にとって非常に長たらしくなってしまったこの論考もここで終わりにしたい。私達は皆個別の存在である。私達が社会的存在としての私達を余りに強く主張したり、そうした事を他者にも自分にも要求するのであれば、個人個人としての私達のエネルギーは弱まりそして、結局はその社会そのもの(その社会の成員は個人に他ならないから)も弱まってしまうのだ、という事を我々みんなは記憶しておいても良いのだ、と私は思うのだ。